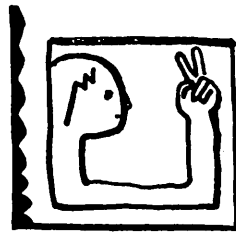


沢内村見聞記

全国に咲かせ白ユリの花

松 沢 常 夫



□□はじめに

三月二十六日、東京・代々木公園の政談演説会。三万人の参加者を前に、松岡英夫さんはこう切りだしました。

「平和をあくまで守り通したい。この一点だけで都知事に立つ決意をしました」

聞きながら思ひだしたのは、老人医療無料制度発祥の地・岩手県沢内村の故深沢晟雄（まさお）村長のことです。深沢さんも「住民の生命を守るために私の生命をかけよう」のただ一点を公約して村長選に立ったのでした。「平和」と「住民の生命」——現状の根本的な危機に対する鋭い認識、だからこそやむにやまれぬ変革への闘志。

松岡さんは、こうも言いました。鈴木保守都政が自慢する「都財政再建」がいかにインチキなものかを批判したあと、こう述べたのです。

「そういうわずかな赤字とか黒字とかを論じるよりも、いったい都民のためにどういう都政をやるのが問題です」。本質へグッと突っこん

だのです。

そのとき、私の頭には、沢内村の増田進病院長から聞いたばかりの言葉が浮かんだのです。

「老人医療の無料を続けるかどうかは、ゼニカネの問題ではないんですよね。おたがいの健康をおたがいが守りあう、おたがいに助けあう、という姿勢の問題なんですよ」

私が初めに沢内村を知ったのは、一昨年八月二十三日付け『赤旗』の記事によってでした。全国で初めて老人医療を無料化し、早期発見、早期治療に徹するなかで医療費がかからなくなり、国保の保険料も大幅に引下げた——『小さな村の偉大な実験』と題したその記事を読んで、私は沢内村にどうしても行ってみたいくしょうがなくなりました。というのは、当時大きな問題になっていた老人保健法案との関係もあります。この村には、何か根本的なもの、本質的なものがある、と感じさせられたからです。

二週間後、現地を初めて訪ねてみて感じたのは、人間の生命を守る、

住民の生命を大切にするという根本目標に向かって住民自身の運動を開展させるなら、こんなことまで出来るのか、という驚きでした。そしてその運動がそれまで私がついていた「村」のイメージとはまったくちがう、自治体の運動でありながら、私たちの組合、建設一般全日自労の中西五洲委員長が『日本の労働組合運動をどう建てなおすか』（合同出版）の中などでも強調している「要求実現に執念をもつ」「心の通いあう労働組合運動」そのもの、という感じさえしたのです。

一昨年九月と昨年十二月の二回、それぞれ一泊二日の短い期間でしたが、現地を訪れ、その報告を私の活動する建設一般全日自労の機関紙『じかたび』などにのせてきました。そのいくつかをここに再録させていただきますとともに、沢内村の運動に驚かされた点を補足して報告したいと思います。物事の根本を、本質をとらえた村ぐるみの運動を。――

□□住民の生命を守る村

Ⅱ 第一回訪問記Ⅱ

老人医療を有料化させようとする第二臨調、老人保健法案の考え方は根本的にまちがっている――。岩手県沢内村を歩いて、私は確信しました。人口約五千人、千百世帯の小さなこの村が、赤ちゃんと六十歳以上の医者代をただにしたのは、なんと二十年も前から。今年も国民健康保険のかけ金も大はばに引き下げ。そんなことがなぜできたのか。まず村立沢内病院をたずねてみました。

「がまんせずに来れる」 お昼前。待合室では、おばあちゃんたちが話に花をさかせていました。病院のマイクロスプスで送りむかえしてくれる

ので、弁当もちで、ゆっくりきているのです。

「どんぞ」と、だしてくれた枝豆の、コリコリしておいしいこと。

「むかしは病院なんか、一回も来たことなかったな」「冬になれば、背たけの二倍も雪がつもってどこにも行けね。箱ソリさのせて、はこばれるときは、もう死ぬときだもん」「雪の上さ走る車、みたときはびっくりしたな、それにのせて、つれてきてくれてな」「金さとられるときは、がまんしたけど、ただになつたら来やすいわけよ」……。みんなただで医者にかかれることが本当にありがたいと言います。

そこで、こんどの国会に、老人保健法案がだされて、老人医療の有料化がたくらまれているが、どうか、ときくと。

「こまります。とられないよう運動してください」「薬もらっても、するものがあるから、なんぼか金とれば、ちゃんとのむようになるべえって、テレビでいったな」「おらみたいな年よりはいいけど、かせいどる若いもんがしんどいわけよ。うちでは娘が一人で働いてるが病院さいけといっても、休めねえって、がまんしてるもん」「年よりが少しでもだせば、若い人のぶんが軽くなるんだら考えねばな」

そこで、またきました。

「沢内村では、今年から保険料が安くなったよね。よそでは、どんどん保険料を高くしているのにどうして安くできたんですか」

「そりゃあ、大きい病気にからねえからよ。がまんしねえで、早目にお医者にかかれるからな」。こんどは、みんな自信をもってそういいます。

村長ののこした精神 「住民の生命を守るために私は命を賭けよう」
待合室のすぐむこうにある村の健康管理課の部屋。パッと目にとびこ

んできたのが、正面にかかげられた故深沢村長の言葉です。

かつては、雪にとざされ、赤ちゃんの死亡率日本一を記録した村が、どんなふうにして今にいたったのか、照井富太主幹にきいてみました。

昭和三十三年に深沢村長が生まれ、夜中まで村の各部落や団体の人びとと話しい、豪雪・貧困・病気の三悪追放にたちあがったこと。

まず、ブルドーザーを買って、冬でもどこへでも行けるようにし、夏は開田に役立て、三十五年から六十五歳以上、三十六年から赤ちゃん六十歳以上の医療をただにしたこと。

乳児死亡率半減運動にとりくみ、三十七年には、ついに死亡率ゼロを達成。それ以来七回もゼロを記録していること。

最近では、いろいろな設備、施設もとのい、健康増進・予防・健診・治療・リハビリを総合的にやっていけるようになったことなどを説明してくれました。

「いま老人医療のことがとやかく言われますけどね、老人になってからの健診だけでなく、若いときから、生まれる前からやらなければね。五十二年から村内全成人の人間ドック形式による総合健診をはじめたんですが、これはたいへんでした。

みんなドロカぶって働いてるわけね。健康よりも明日の生活の方が大事という人ばかり。第一希望は何日、第二は何日と、本人のつごうをきいたり、婦人会が対象者全員をうけさせるように運動してくれたり、村ぐるみの運動でした。

この検査は一人三万一千五百円かかるんですけど、ものすごい議論をして、本人は四千二百円のふたんにしたんです。これだけ金をかけたん

だから、私たちもビリピリしてましたね。でも、受けた人が、これはすばらしいと感じて、広めてくれたんでしょね。年初めに九百人だった受診希望者が、おわってみたら千七十八人になっていました」

「あの深沢村長の言葉は、私が書いたんですよ。深沢さんは、やればできるんだってことを教えているんですね。住民が、こぞってがんばって、本物にむかってさえやれば、国をうごかすことだってできる。そういう村長ののこしてくれた精神をうけつぐべきだと思ってね。全国自治体がどこでも本当に生命を守るといふ政治の基本にたつて、がんばってもらいたいですね」

照井主幹は、村ぐるみで生命を守った運動をひととおり話してくれたあと、

①医者代がただだし、村立病院なので村民が病気をしなくなればなるほど、村の財政もよくなる、②医者と患者がよく話しあい、本当に必要な薬だけだすので、薬つけにすることもなし、患者もなっとくして薬をのめる、というような患者の立場に立った医療のしくみが大切だと強調しました。

そして、「その結果ですねえ」と、ほこらしげに、数字をあげてくれました。

「五十五年度の一人あたり医療費は岩手県平均が十一万円なのに沢内村は八万四千円。七十歳以上だけみたら県平均が三十七万五千円、沢内村が十七万八千円で、半分以上。ここ数年、一年間に一億円くらい他の町村より節約できているわけです。いまの病院は五十一年に三億五千万でできたのですが、三年間でモトがとれた計算になるんですよ。それで、保険料を一世帯あたり九万五千円から八万六千円へと、引下げるこ

ともできたんです」

予防から健康増進へ いま沢内村では、予防から一步すすんで、健康増進のための体操に力をいれています。

老人クラブに保健婦さんが出かけて、健康体操の指導。十時と三時には体操の有線放送も。

「中年婦人スポーツクラブ」は、沢内病院の増田進院長夫妻が指導してくれています。「肩こりや腰痛は薬なんかより、スポーツで」というのが院長の考え。みんなが運動できるようにと、バレーボールのかたい皮をはがした「ビーチボール」をあみだしたり、夏は水泳、冬は歩くスキー大会と、だれでもやれるものばかり。道具も中学校の借りもの。おかえしに雑巾をぬって、おくれたそうです。

もう一つ重要になっているのが、健康に働きつづけられる職場をつくること。

婦人会は、労働組合のない誘致企業の労働条件改善にも一役かっています。村のバスを借りて工場めぐりをし、アイロンかけの仕事場では「こんな窓もないところで、よくのぼせないわね」と大声をあげたりしています。

婦人会の久保キエ会長は「工場には内職の人も行ってるしね。あんまり文句いうと、工場ごとつぶされるって、議員さんに言われるんですけど、丈夫で長もちして働いてもらった方が会社だっていいでしょ」と、こわいものしらすです。

太田祖電村長も「農業を中心とした地場産業の育成にとりくみ、老人も自然の中で働けるようにするのが、健康のためにも大事」という考えです。

いざとなればなんでも ところで、厚生省は老人医療有料化をねらう老人保健法案を今月末からの国会で必ず成立させようと、異例の対策本部までつくりあげました。

これをあとおししている第二次臨時行政調査会は、八月二十二日、沢内村に六人の調査団をおくってきました。

そのときのようすを新聞は、つぎのように報じています。「独自の健康村に誇り。老人医療無料化、村長継続を主張」(朝日)「沢内方式むしろ安上がり。健康管理こそ優先、村長強調」(読売)

「沢内方式がすぐれていることは、臨調もわかったはずですが、ただ、それをやるかどうかは別ですけどね」と照井主幹も言います。どこからみても、医療有料化の第二臨調の側に、道理がないことは明らかなので

す。

厚生省は「有料化といったって、外来は毎月たった五百円、入院は一日三百円で四カ月間だけじゃないか」(注)と言いたいのでしょう。しかし、五百円は、診療課目ごとにとられるのです。沢内村では、その五百円がこわくて、医者にかかれないうような人のことをこそ考えてきたのです。

増田院長は「医療費が有料化されたらお年よりは、またがまんする。いまの医療制度の欠陥に手をつけずに、自己負担や自治体負担をふやすことは、結局、貧乏人にしわよせすることになる」と指摘します。

有料化したお金で結局は製薬会社や軍事費にまわるしくみを話すと、待合室にいたおばあさんたちは「とんでもない」と、目をひきつらせた。

国民健保の財政が苦しくなり、無料年齢の引上げ案がだされたとき、

老人クラブが中心になって反対の署名運動をおこし、六十歳からの無料を守りぬいた実績もあります。

婦人会の久保会長も「みんな、むかしの苦しさにはもどりとくなくないんです。病院があぶなくなればみんなでカンパしよう、掃除なんかも私たちでやろうと話したことがあります。一人じゃできなくても、みんなであればできるってことが、二十何年か、かかったけど、わかってきたんです」と、いざとなれば、なんでもやるかまえができています。

〈注〉のちに修正された。

〔じかたび〕81年9月〕

□□村長、病院長が語る哲学

Ⅱ 第二回訪問記 Ⅱ

今年の二月から「老人保健法」が実施され、七十歳以上の人はみんな、毎月一つの病気にたいして四百円、入院すると一日三百円の自己負担をとられることになります。私たちは国に抗議するとともに、自治体が自己負担分を肩がわりして、老人医療無料制度をつづけることを要求してきました。その結果、名古屋市や埼玉県三芳町などで実際上、無料をつづけることをきめています。日本で初めて老人医療を無料化した岩手県沢内村(昭和三十五年から六十五歳以上、翌年から六十歳以上と乳児)でも、昨年十二月二十二日の村議会で、無料継続を全会一致で決めました。「村議会で無料継続をきめるらしい」という話をきいた私は、いってもたってもいられず、二度目の沢内村訪問に旅立ちました。

貧乏村がなぜ政府の圧力に屈せぬか 沢内村は盛岡市から一日二往復のバスで約二時間。奥羽山脈の中の盆地にあり、冬は三メートルをこす雪にうもれてしまします。

そのため、むかしは医者にもかかれず、「コロコロと死んでいく」人たちがたくさんでした。

昭和三十三年に故深沢晟雄村長が誕生、現村長の太田祖電氏を教育長にむかえて「豪雪・多病・貧困」の三悪追放を村の根本目標とし、村ぐるみの運動をすすめてきました。

ブルドーザーで雪をどけたのも、改良住宅を建てたのも、老人医療を無料にしたのも、その目標にむかつての一步一步でした。

しかし、五十七年度だと、二十四億の村予算のうち、村民からの税金はたった九千万。あとは国や県の補助がたよりです。

人口も二十年前にくらべて二千人近くへって、約四千八百人。そのうち、六十歳以上が二割をこえ、高齢化がすすんでいます。

そんな、国に頭の上がらないはずの「貧乏村」が、「上のせ福祉をやる」という自民党政府の圧力にまけないで、無料をつづけることにもみきれるのはなぜなのか。

前回の訪問(五十六年九月)ではおあいできなかった村長さん、病院長さんから、じかにおききたい、それが今回の目的でした。

「村民の意志に従うのが当然」 ついた二十一日の夜、宿で太田村長(61歳)があつてくれました。連日の村議会でつかの間のなかをです。

村長はお坊さんで、「私のお寺は相当大きいけど、すっぱり雪につつまれると、野ウサギが山とまちがえて、てっぺんで遊んでおります」なんて笑わせながら、「なんでも聞いてください」と、やさしそうに言うてくれました。

私は「国が決めたことだからしたがう」という自治体が多いなかで、村長さんは、どういう考え方でがんばっているんですか」と単刀直入に

きりだしてしまい、まずかったかなと思って、「ちょっと答えにくいかもしれませんが」とつけくわえました。

すると村長は「なんも答えにくいことや、むずかしいことはないよ」と言って、こう話してくれました。

「NHKにでたときも言ったんだが、自治体には、国のやることにしたがわなければならぬものと、独自の色あいをだしていいものと、二つあるはず。沢内の医療無料化は住民自身がえらんものだ。ほかのものをすえおいても、これをつらぬいてくれ、という村民の意志なら、それにしたがうのが自治体のあり方でしょ。しかも、国は医療費をおさえるために有料化するというが、沢内では二十年間も無料をつづけてきたおかげで健康な老人がふえ、国保会計も黒字になった。これだけ成果をあげているのに、国が決めたんだから地方自治体も全部おなじにせいというのは、角をためて牛を殺す」とおなじじゃないか」

村長は「それは悪政だよ」と、ズバリ言いきました。

村の中に流れてやまない目標 私医療費の問題について「沢内も一時国保会計が大赤字で、たいへんだったときがありますが、必ずよくなるという確信があったのですか」ときいてみました。

「確信？ なかったですね。だけど、もうダメだとも思わなかった。そういうものだ、金にかかるものだ、と思ってたから。とにかく、どんなことがあっても、村政の中心になる無料医療は最重点として守りぬこう、その一点ばりだった」

村は全村的な論議をまきおこし、早期発見早期治療を徹底。そうするうちに老人医療費は下がってきました。五十六年度には一人あたり十八万七千円。県の平均四十万、国の平均三十九万円とくらべても半分以上

になりました。

私はさらに、「自民党政府の圧力にまけない力はなんなのか」とつっこんでみました。

村長は「たしかに補助金などでは自民党の議員さんにお世話になっている。それは、ないがしろにできない」と前おきしながら、こう語りました。

「それをこえて、わが道を行くには、その村に哲学がなければならぬ。つまり、村民の中に流れてやまない核になる思想、目標がなければならぬ。沢内のそれは、生命尊重の政治である。単なる主義主張ではなく、人間の生命を守ることに徹しようという村民全体の意志が、決意がある。貧乏だけど、辺地だけでも、それをのりこえていく活力がある」

たんたんとした口調のなかに、自然と力がこもります。

「健康で長寿の村を」と名刺に 村長さんとあった翌日、村立沢内病院の増田進院長（50歳）におあいできました。

病院の待合室の一角にある新聞、雑誌立ての中に、『くらしと福祉の大集会報告集』（注）がおいてあるのをみつけて、思わずうれしくなりました。

診療をおえて出てきた増田院長は、私のカメラをみて「キャノンゼンですか、もうないんでしょ」と、気さくに話しかけてくれます。

「ゼンだかなんだかしらないけど、組合にある古いカメラなんです」と答えながら、名刺を交換してビックリ。名前の上に大きく『健康で長寿の村を』と印刷されているのです。

「老人医療を有料化したら、結局は貧乏人にしわよせすることになる」

国会で参考人として意見をのべたこともある増田院長。一番大事な点を、一言で言っておくと、立て板に水。

医療は福祉の健康ようご部門だ 「老人だけでなく、本当はぜんぶ無料の方がいいんですが、お年よりには『うばすて山』の考えがのこっていますからね。もし自分の健康とお金がかかりにかけられたら、自分がお医者に行く金を家族のためにつかってしまいます。それで、お年よりを無料にして、サイフをもたずに病院にこれるようになれば、お嫁さんにも『顔色が悪い、医者についてこい』と言うようになって、家庭が明るくなってきました。働きざかりの奥さんたちが、年に一回一泊二日の人間ドックに入るときも、『こんどは、おまえの番だ』と言って、だしてくるようになりました。こうして、お年よりへの十割給付をつうじて、みんなが、おたがいにお助けあって健康を守りあう、というすがたがつくられてきたんです」

「少しくらい自己負担すべきだ、という意見もききますが、それは自分の健康は自分で守れ、という考え方ですね。だけど、それでは守れなかったんです。だから、十割給付をつづけるかどうかは、財政事情でどうこうする問題ではなく、おたがいの健康を、おたがいに守りあう、という地域医療の考え方をつづけるかどうかの問題なんです」。

私は目のさめる思いがしました。「ゼニカネの問題でなく、みんなでお助けあうという考え方の問題」——これこそ、いまの老人医療をめぐる議論の根本にすわらなければならぬことだ、とわかったのです。

「厚生省の社会保障制度審議会が視察にきたとき、ある大学の先生が『ここには福祉はあるけど医療はない』と言ったんです。この先生は、自分で金をだして買うのが医療だと思っている。だけど、沢内では医療

は買うものではなく、村が保障するものなんです。医療は福祉の健康ようご部門みたいなものだと考えているんです。それで、生命が守られているんですよ」

対話重視の健康教育をつらぬく 私は、こうした考え方に立ちながら、具体的には、どういう医療活動をおこなうことによって、医療費が安くすむようになってきたのか、なかには「沢内は手ぬぎ医療で、医療費がかからないんだ」という批判もあるが、ときいてみました。

「手ぬぎだなんて、じょうだんじゃない。どれだけ高い薬をつかったか、どれだけ検査をしたか、どれだけ手術をしたか、そんなことで、よい医療かどうかを判断できるんですか」温厚な増田院長がムッと怒りをあらわにしています。

そして、沢内では、健康増進・予防・健診・治療・社会復帰を一体のものとしてすすめてきたこと、そのなかで対話を重視した健康教育活動をつらぬいてきたこと、を説明してくれました。

「たとえば、婦人会なんかと病院が協力しあって、肩こり・腰つう者スポーツ大会をやる。これは注射より効果があります。病院の収入にはなりません、治療の一環なんです。それから、患者と接するあらゆる機会を健康教育の場としてとらえています。だから、時間外であろうと、往診だろうと、決してことわりません。たいしたことがなくても、患者やその家族と接し、直接その病状をみながら話しあうのが、もっとも効果のある健康教育なんです。村民一人ひとりが自分の健康手帳を持ち、病院にくると、まず健康相談室で看護婦と対話する、人間ドックでも医師、保健婦などと十分な対話の時間をとる。こうして、私たちも地域のこゝろ、住民の生活、その心を教えられ、いっしょに前進できるんで

す」

つくりだされた限らない信頼関係　いま内科と外科の医師が一人ずつ。当直も交代です。それと歯科医が二人。「こんな少ない体制で、よくやれますねえ」ときくと、

「ええ、患者に『先生、つかれてるみたいだから、きょうはいいよ』なんて言われて。だから、おたがいさまなんです。患者がこまったら医者が一生けんめいやる。医者がくたびれたら、患者も少しはいたわってくれる。それで、やれるんですよ」

二十年前、本当は医者がイヤで、高給をくれるという沢内でひとかぜぎしたら、好きなことをやろうと思ってここへ来た、という増田さん。

「村の人たちが熱心で、村の人たちに教育されて、アリ地獄にはめられてしまったんですね」と笑います。

限らない信頼関係をつくりだし、自民党政府の圧力とたたかう沢内村。たくさんのことを教えてくれました。

（じかたび）83年1月）

〈注〉私の組合である建設一般全日自労などが毎年おこなっている集会。

□□沢内は「老人の天国」

「ホホホ、これでも昔はずいぶん夜ばいをかけられたんですよ。東京にいる娘が来い来いっていうんだけど、ここを離れられませんか。死んだ主人をおいてくような気がするし、医療も福祉もいいし、お友だちもいるしね。沢内は老人の天国といわれますけど、そういうことなんですよ、ホホホ」

ひとりぐらしで雑貨商をいとなむ石井多満さん（68歳）は、ゼンソクに悩まされているとはとても思えないほど明るい。

老人医療無料発祥の地として知られる岩手県沢内村は、老人保健法施行後も六十歳以上の無料制度を継続しているが、老人を大切にする村の施策は実に豊富だ。

太田祖電村長は「『体の健康と生命』は守ってきた。これからは『心の健康と命』をいかにして増進させるかだ」と語り、その中心に、村民どおしの交流と連帯をすすめる。

たとえば、ひとりぐらし老人の昼食会は、石井さんの一番の楽しみ。月一回、各部落まわりもちの会場へ村の車で行き、婦人会の手づくりの食事を楽しみながら話に花を咲かせる。

婦人会も三世代交流を最大の課題としているし、老人クラブと保育所の交流は持続的に発展している。

郷土芸能をいっしょにうたい踊り、いっしょにイモまきをし、大根の種をならべ、運動会で奮戦し、収穫祭でおでんをつくり、みんなでテールを囲む。老人も楽しいが、子どもたちの目の輝きがちがうという。

また、「学習」が重視され、老人自身の生産活動、趣味活動、教養活動、福祉活動を発展させるために十年前から「人生楽園」が設けられている。これは村と老人クラブなどが協力してつくったもので、学習講座や旅行が計画され、郷土芸能もここで学習する。

こうした活動の拠点には老人コミュニティーセンター、農家高齢者創作館など。創作館館長で、あけび細工の指導をしている藤原春吉さん（82歳）は「先だって東京池袋の西武デパートで作品発表会をやったんですよ。年がいったからって、あきらめなければ、生産意欲も勉強する意欲

も、どんどん出てくるもんですよ」とにこやかに話す。

二十数年前、故深沢晟雄村長は「年よりを生産能力がないからと粗末にするようでは社会は無秩序になってしまう」と語って、まず老人から無料医療を始めたが、人間として、村のかけがえのない一員として、沢内の老人は大切にされている。

〔機関紙連合通信〕83年4月

□□「やればできる」の精神

「あきらめ」とのたたかい 沢内村の運動で驚かされたことの一つは、「あきらめ」の精神とたたかい、「みんなやればできる」という確信をうみだし、それを生きつづけさせている点です。

「まんつまんつ仕方がねえごと」――。

馬の背のような雪道ですれちがうとき、片ひざを雪に没して待つてくれている人へのこの感謝の言葉には、豪雪を「宿命」としてあきらめるしかなかった歴史が象徴的にあらわされています。

この住民の中にある「宿命」観とたたかい、「野蛮条件の解消」に住民を組織したのが故深沢村長や太田現村長らでした。

「深沢さんも私も村の外におった時期が長くありましたから、客観的なマナコをもって村をみることでできたわけです。今でも出稼ぎに行く人を集めて、どうせ行くなら客観的なマナコを身につけてこいと話しますが、私たちは雪にうまることも、貧乏も、医者がいけないことも当り前ではないのだ、というマナコをもっていた。だから矛盾を矛盾として妥協しないで突っこんでいく姿勢があった。これが村の再生の根本条件

の一つだった」と、太田村長は語ります。

深沢さんには、このマナコで見た、あまりに悲惨な現実への怒りと深い願いがありました。

「月ロケットが飛ぶ時代に雪道をテクテク歩かねばならんとは、まったく時代錯誤だ」「人間の生命にかかわる事柄を放りっぱなしでいる国の政治が悪いし、大切な医者が居つかないようなままにしている村の状況がなお悪い。こんなことをこぼしているだけの自分たちがもつと悪いし、仁のない医者はまだ悪いと思わないか」――深沢さんは、だれかれとなく、こう怒りをぶちまけたようです。

深沢さんは、そのマナコを、怒りを、願いを、あくまでも村民自身のものとしていくためにあらゆる努力を傾けました。

深沢さんは「村づくりをするには、住民の人々と一緒に物を考え、悩み、苦しみ、そして願いをもつこと、すなわち住民との信頼関係が村づくりの基本である」と考え、「住民が一つの職場に、地域に、あるいは生活の中に本当に生きぬくためには、まず組織をつくり、自分達で自分達の問題点を見出して解決していくことが必要」だとして、婦人会や役場の職員組合などをつくりあげることからまず始め、村長になると、太田現村長を教育長として村によびよせ、二人が中心となって住民と一年間にわたり話しあい、「豪雪・多病・貧困」の三悪追放を「何十年かかるかわかんけれども」やりぬく村の基本目標に設定、ふたたび各集落をまわって、冬季交通確保期成同盟会をつくり、ブルドーザー一台を借りることから、一步一步実績をかさねていきます。このことは『沢内村奮戦記』（あけび書房）で太田村長がくわしく紹介しています。

執念の訴え そのさい、私が感動するのは、深沢さんの執念のような

訴えます。「やらずにはおくものか」という村民全体の気もちを引きだすような訴えです。

たとえば、昭和三十七年一月号の『広報さわうち』にのっている「新春に思うこと」の一節はこうです。

「来る年も来る年も、同じことを考えながら、今又二十七年の春を迎えました。……『健康で豊かで文化的な生活』、これを切なる願ひとして皆様も私も共に努力をして参りました。そしてその悲願の道はいかにけわしいものであるかを知り過ぎるほど知りました。病魔にうめき苦しむ人々、天寿に反いて去るほかない人々、景気不景気には全く無縁な貧しい人々、私達の仲間の不倖せはいつまでも続き、村の暗い影はいつまでもつきまとっております。住民の健康確保の為に力んでみても、土地改良や畜産をいかに叫んでみても、雪の征服や僻地解消にいかにも熱をあげてみても、その成果の微々たることに私は暗然とせざるを得ません。政治の難かしさ私の力の足らなさを泌々と感ぜざるを得ません。然し私はこの悲願を断念するわけには参りません。健康で豊かであることが倖せの絶対要件である限り私はこの道を断乎として歩み続けることでしょう。……若しも健康や土地改良が住民の倖せの基礎的条件だとするならば、それは一人一人俺がやらなければならないという責任の自覚こそ必要であり、その責任の集計が即ち一体感制ということになりましょう……」

深沢さんらは同時に「やればできる」ことを事実で証明し、それを宣伝、教育する点に相当な力をいれたようです。

「そんなことで除雪できるか、ホラフキ村長」という声もあるなか、ブルドーザーを動員して二カ月たった時点での『広報さわうち』（昭和三十三年二月）にはこういう記述があります。「成功だったか失敗だったか……結局、除雪は雪をためないで、根気よく除雪すれば、このような深雪でも征服できる、という結論だけはえた」。

当時、教育長として『広報さわうち』の編集長をしていた太田村長は「雪をためなければいいんだ、というのは当り前のこと。単純だけれども真理なんですよ」とサラリと語りますが、ここにはまったく無理がなくだれでも納得のことができることが確認されていくのです。

そして五年後、『広報さわうち』には「村民の団結、宿命を破る」という大みだしがおどります。

「昭和三年、冬季交通確保期成同盟会を結成、一台のブルを借りてはじめたこの仕事。それから五年、盛岡までのバスが開通したのは二八年ですから十年ぶりについて悲願がみのり、村民待望の「冬でも盛岡へ」の夢が実現したわけです。宿命と思っていたものが、やればやれるという強い自信を生み出したものです。村民一丸となつての雪と闘う努力が今ここに大きく報いられたわけです。閉ざされていた道が今熱意と努力で切り開かれたのです」。

「やればできる」という自信は、三十七年に日本でも初めてといわれる乳児死亡率ゼロを記録したことによって、住民の中にはっきりと定着し、それが家庭内の明るさにもつながっていきます。

昭和三十年ころでさえ千人に対し七十人と日本一の乳児死亡率を記録していた沢内村が、わずか数年で死亡率ゼロの金字塔を打ちたてた背景には、四名の保健婦のめざましい活動をはじめ、網の目のように張りめぐらされた保健委員（そのほとんどは婦人）の活動、乳児医療無料制度など村ぐるみの保健活動がありました。ここでは、くわしく述べるよううがありませんが、『おなごなんだ、ワラシなして、ただかせげばいいんだ』と言われてきたのに、深沢さんはしゃつ中、婦人会に来て『女が変わらなければ村は変わらない』と言われたのは今でも覚えています」（久保婦人会長）というような、婦人会、若妻会の結成と婦人の自覚、

学習の高まりが、この成果の大きな要因でした。

「やればできる」の精神は学校教育の中でもたえず強調され、子どもたちにひきつがれていきます。小学校社会科副読本『わたしたちの沢内』（村教育委員会監修）のむすびの文章は、「これからの沢内」と題して、つぎのようにのべています。

「わたしたちの村に人がすみついてから、長い長い年月がたっています。この間、人々は雪やさむさとたたかいながら、野や山を切りひらき、田畑をつくり、和賀川の水にかぎらないめぐみをうけながら、すみよい村にしようとしてよくしてきました。よその土地とのむすびつきをよくしたり、冬の交通をべんりにしたり、病気をなくするどりよくなどをとおして、わたしたちの村は大きくはってんしてきました。できないと思っていたことが、とりくんでみるとできたのです。村の人たちの長い間のねがいを、みんなが力をあわせてみおらしてきたのです。そして今、わたしたちの村は、さらにすみよい村づくりをめざして、かぎりなく前進しようとしています。」

住民自治の精神 「善政はあるが住民の運動はない」という批判を沢内を訪れたことのある人からよく聞きます。私も初めはそういう感じをもちました。

私は第一回訪問のとき、会う人ごとに「老人医療無料制度を守りぬくために、これだけの実績をもつ沢内村が村民総決起集会を開くとか、村長がアピールを発表するとか、全国の先頭に立つてもらえないだろうか」と、あつかましくも頼みこんだのですが、反応は「そういうことはまだ考えていない」（村職組）、「老人保健法はよく知らない」（婦人会長）というぐあい。

その後、老人保健法案がヤマ場となった昨年三月に増田病院長が国会に参考人として出席したり、九月に「老人の主張大会」を開いて無料制

度存続の村内世論を盛りあげたりはしましたが、ついに政府に向かっての表だった大衆行動はありませんでした。今年二月一日、太田村長は東京で労組、民主団体が開いた「老人医療無料復活集会」であいさつした際にも「私は国の方針にたてつきたいわけではない。それはみなさんのやること。私は村民の意志を尊重し、村長として村民の生命とくらしを守りたいだけ」と述べていました。

こうした姿勢について「深沢さんは法律に違反しても憲法には違反していない。もし、県や国が法律違反で処分するなら、裁判をやっても十割給付制度は守っていく、と言った。それにくらべると弱腰だ」という批判も耳にしました。

しかし目立った対政府闘争がなくても、そこには、明確で強い村民の意志を尊重する住民自治の精神が貫かれていると思うのです。だから、太田村長には何のヒケメもないのです。それどころか、そのしたたかさ、腰のすわりぐあいに驚かされるばかりなのです。

「五十七年度予算は二十四億、それにたいし村の独自財源は九千万ですから何％ですか、四％ですか、一割自治にもならないんですよ。だけど、沢内といええ、みんなお金をくれるんだから、そこが自信ですなあ。小さい自治体は重点的に金が使えらんです。保健なら保健にパーッと使える。そうすると特徴ができて、実績がある。こういう所には安心して補助起債がみとめられるんですね。信用とは実績が上ったという一つの力じゃないでしょうか。国の老人医療有料化で、村の負担がふえるのは月に二十万くらいですよ。それだけの金で大きい顔ができるんだから、ハッハッハ」

連帯と民主主義 私が沢内に行って本当に感心したこと、それは、た

えず自分より弱い立場、苦しい立場にある人のこと、一番困っている人のことを考えてコトに当る、あったかい村だ、ということですよ。

「年よりが少しでも出せば、若い人の分が軽くなるんだら考えねばな」「おらみたいな年よりはいいいけど、かせいどる若いもんがしんどいわけよ」——前記ルポで紹介した病院待合室での、おばあさんたちの言葉は、単なる遠慮ではなく、若い人たちの苦勞を思いやる言葉です。活躍めざましい婦人会の久保会長は「こういう活動をいろいろやっても、そこに出てこれないほど忙しい人が、健康のことにも一番無関心になってしまう」ことに頭をいためていました。田中トシ保健婦長に悩みを聞いたら、「病院に相談所ができて、ここに来れる人はいいいけど、その分、私たちが部落をまわれなくなつた。とくに、ねたきりの人なんかにもっと来てくれと言われてこまっている」というのです。増田病院長が「老人医療の有料化で自己負担を多くするのは結局、貧乏人へのしわよせ」と、ズバリ言いきつたのは、みごととしか言いようがありません。

「自分さえよければ」という考えを生みだす資本主義社会にあつて、このような姿勢が全村民に定着してきたことこそ、沢内村の運動の素晴らしさを物語っています。

「これからの沢内」には、政府の圧力の問題、高齢化が進むなかでの仕事の問題など、いろいろな難かしさがあり、意見のちがいもあります。しかし、この連帯と対話を軸とした民主主義、そして住民自治の精神が貫かれるかぎり、沢内村は「やればできる」ことを証明しつつづけていくと思います。

太田村長は雄大に、のびやかに展望を語ってくれます。

「都市中心の政治は二〇世紀で終り、という気がしますなあ、二一世紀はやはり、それぞれの自主性をもった地域が中心になっていく時代ですよ。わが村はそこに向けて努力しているんです。そのさい、自分たちで自分たちの生活と生命を守るモンロー主義的な形でいかないと、農民の精神は死んでしまふんです」

何事にも、初めはひかえめの増田病院長もこう言います。一昨年の三月に徳州会の徳田虎雄理事長とのテレビ対談のあと、徳田理事長が「沢内の医療は『谷間の白ユリ』、沢内にしか咲かない」と評したことに關してです。

「あんまり徳田さんが元気がいいもんだから、『あなたは『南海の虎』沢内の医療は『北の白鳥』です』と言ったんですよ。そうしたら、いや沢内のは『谷間の白ユリ』だって。いいところをついてきましたよ。だけど、沢内には年間三千人もの視察がくるんです。外国からも来る。彼らは白ユリの株をとって帰るんです。やがて白ユリは全国で花を開く、そう信じています」

